

アムスルだより

No.32 1998年 7月13日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所



〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/pb3/saburo>

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



海藻のようで海藻ではない

-ウンバチイソギンチャク-

阿嘉島周辺の海はカラフルな生き物の宝庫です。私たちもそういった生き物について目を奪われてしまいがちなのですが、海の中には他の地味な生物そっくりだったり、海底の風景にとけ込んだり、ちょっと見ただけでは見過ごしてしまう生き物もいます。今回は、こんな普段は見過ごしがちな生き物のお話です。

5月の終わり頃、調査の帰りにクシバルで奇妙なものを見つけました。岸から10mくらい沖の砂地の上に、まん丸い海藻のかたまりのようなものがあったのです。すこし気になったのでよく見てみると、それは40cmほどの石の上にくっついているようです。その石を手に取り、上からじっと見ても、やっぱり海藻にしか見えません。ところが、石をひっくり返して、ウラ側を見てみると、そこには、石に張り付いたうす茶色のやわらかそうな体がありました。こんな体をもっているのは、もちろん海藻などではなく、イソギンチャク以外ありません。そうと分かれば下手にいじるわけ

にはいきません。イソギンチャクの仲間には、とても強い毒をもっているものがあるからです。そこで、その体に触らないように、慎重にバケツに入れて研究所に持ち帰り、水槽の中に入れて観察しました。図鑑で調べてみると、これが悪名高きウンバチイソギンチャクだということが分かりました。それによると、このイソギンチャクは、ハブの2倍の強さの毒をもっており、そのため、海蜂(ウンバチ)と呼ばれ恐れられているそうです。最初に見つけたウンバチイソギンチャクは、直径12cmほどでしたが、よく見ると石の上には、その他に直径5cm位のものや1cm位のものの合計3個体がくっついていました。

このように強い毒をもつイソギンチャクですから、すごい勢いで餌となる動物を捕まえて食べるのだらうと思い、ためしにキビナゴの肉片を体の上に乗せてみました。ところがいっこうに食べる気配がありません。輸送の途中で弱ってしまったということも考えられるので、翌日まで休ませておくことにしました。ところが、その夜、水槽の灯りをつけてみると、驚いたことに、ウンバチイソギンチャクは昼間と違った形になっていました。円い海藻のような体の中央から、長さ7cmほどの別の体が伸びていたのです。それは、まさにイソギン

チャクの形で、まるで花が咲いたように長い触手が伸びています。そして、その「花」の中央には口がありました。そこでこの「花」にキビナゴを与えてみました。すると、長い触手があっという間にキビナゴにからみつき、口へと運んでいきます。やがて、キビナゴは口からのみ込まれてしまいました。同時に海藻のような体の上にもキビナゴをのせてみましたが、こちらは昼間と同じで食べられることはありませんでした。しかし、翌朝見てみると、もとの「海藻」に戻っていました。ウンバチイソギンチャクは、海の中でも、夜の間にもこの花のような体を伸ばし、餌をとっているのではないのでしょうか。

ウデナガウンバチやハナブサイソギン

チャクなども強い毒をもっており、ウンバチイソギンチャクと同じように海藻に似た姿をしています。この季節、海に行く機会も多いかと思いますが、これらのイソギンチャクにだまされて、うっかり触ってしまわないように注意して下さい。

採取したウンバチイソギンチャクは、今も研究所の水槽にいます。ご覧になりたい方は、研究所まで足をお運びください。ただし、昼間は「海藻」のままですが...

阿嘉島の海より

-今年のサンゴの産卵-

阿嘉島では、5月は満月の6日後の5月17日におよそ2割のミドリイシ類が産卵し、ここまでは前回の予想どおりでした。ところが、6月は過去に例のないパターンで産卵が起きました。ミドリイシ類では、満月の4日前の6月6日と、満月の6日後の6月16日にややまとまった産卵が見られた他は、少量ずつばらばらに産卵が起り、中には精子が元気のないサンゴもあったのです。そのため、研究所ではサンゴの卵と精子を使った実験が思うように出来ず困ってしまいました。また、6月12・13日にはコモンサンゴ類の産卵と同時に、例年は7・8月に産卵するキクメイシ類の産卵も観察されました。過去9年の月別平均値よりも気温と水温が高い傾向は6月の時点でも続いており、これがサンゴの産卵に影響したものと思われます。しかし、詳しいところはよく分かっていません。産卵を見ようとして当てが外れた方もいらっしゃるかもしれませんが、サンゴの生態にはまだ分からないことがたくさんあるのです。

